

キラリ！ 輝く人たち

エレベーターのボタンやお酒の缶に、小さなボコボコした点が付いているのを見たことはありますか。これは点字といい、目が不自由な人はこの点字を指先で読み取って情報を得ています。

今回は、印刷物を点字や音声に変えるボランティア活動をしている「古河点訳友の会」の皆さんをご紹介します。

41年の歴史

「古河点訳友の会」の設立は、昭和50年2月1日。今年で結成41年を迎えました。会を設立する前から点訳や朗読(のちに音訳)のボランティア活動を行っていて、その期間も含めると約半世紀の長い歴史があります。

現在、点訳担当9人、音訳担当6人の15人で活動しています(平成28年4月1日現在)。主に広報やゴミ収集カレンダー、会議資料の点訳・音訳をしており、そのほかにも小学校や福祉イベントなどで点字講習会を開催。点字体験は毎回好評だそうです。

基本的に自宅での作業で、点訳は第1・第3月曜日、音訳は第1月曜日に古河福祉の森会館で校正作業や点字印刷などを行っています。

視覚障がい者に寄り添う

基本理念は「全部漏らさずそのまま読む」「声のリズムは平たんに」。目が不自由な人にとって、音訳された情報がすべてです。写真が載っている場合は、どんな写真か説明もします。読み方に感情を入れると、聞く人にその気持ちを押し付けてしまうので、声の抑揚をつけないように気を付けているそうです。

また、文量が多い場合は、情報を取捨選択し、必要な部分や記事だけを音訳したり、一度全体的なレイアウトを見てから読む順番を入れ替えたりと、聞き手の立場を意識して音訳しています。

「どんなものも読めるように」

古河点訳友の会



「お元気ですか？」2年ぶりの電話

「聞いてよかった」「ありがとう」の声をいただいたとき、やりがいを感じるそうです。

特に印象に残っているのは、個人的に音訳の依頼を受けた人から「お元気ですか？ 今でも(音訳したものを)聞いています」という突然の電話。2年ぶりに電話をもらい、「今でも自分のことを覚えていてくれたことや音訳したものが役に立っている実感が湧いて、とてもうれしかった」と話してくれました。

読めない漢字や地名を調べるのはおもしろいし、点字は新しい言葉を覚えるようで楽しいと音訳や点訳の魅力を語ってくれました。

「古河点訳友の会」の皆さんはとても優しく、作業現場は和気あいあいとしていました。少しでも興味がある人は、ぜひ一度見学してみたいかがでしょうか。



▲防音室での音訳作業



▲点訳した原稿を点字印刷